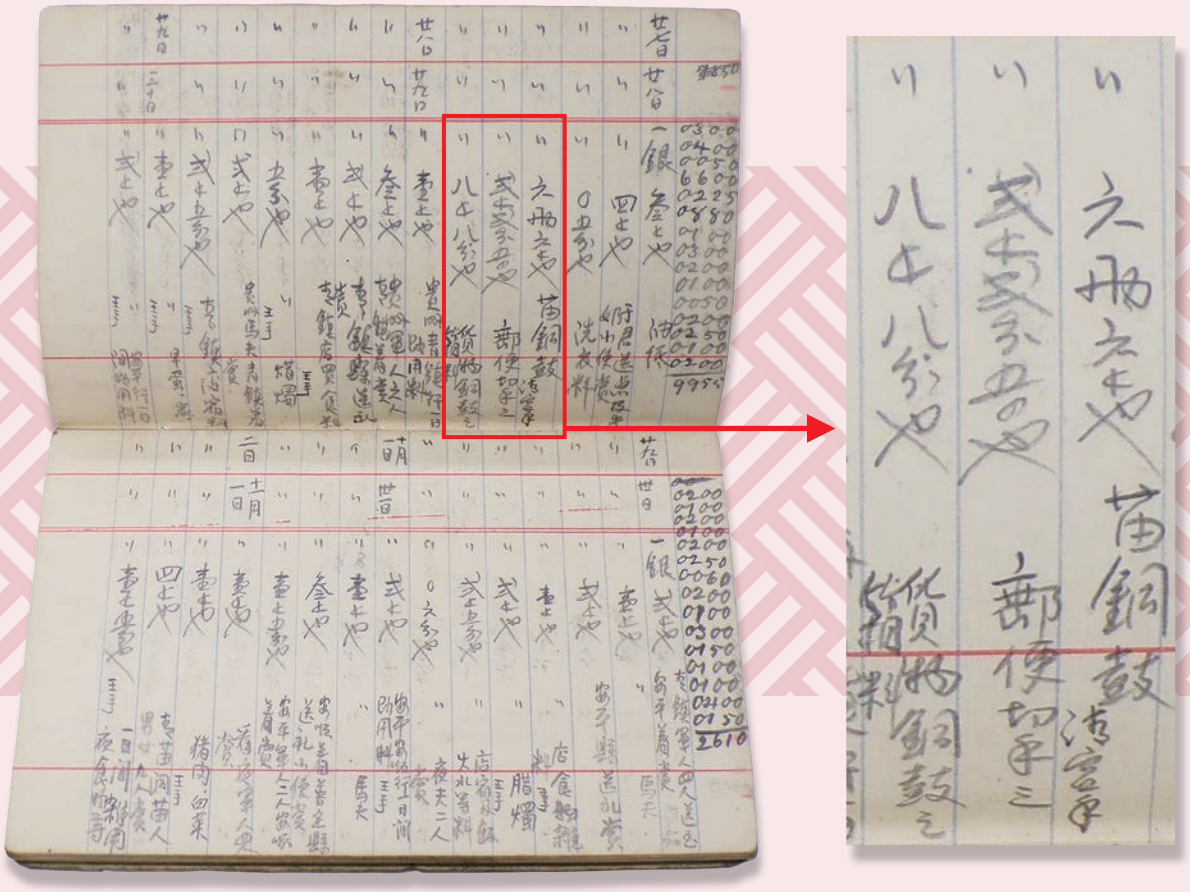
鳥居龍蔵記念博物館
NEWS LETTER

9

2025 Winter

Tokushima Prefectual
Torii Ryuzo
Memorial Museum



今季の逸品

中国西南部調査における支出記録

今回紹介するのは、鳥居龍蔵（1870−1953）が1902（明治35）年から翌年にかけて、中国西南部を調査した際の支出記録です。この時期の鳥居のフィールドノート「西清のたび」には、金銭事情がほとんど記されていないため、この支出記録は大変興味深いものです。

赤枠で示した部分には、銅鼓（どうこ）（青銅製の太鼓）の購入が記録されています。ミャオ族などの少数民族が使う銅鼓は、鳥居が注目したものの一つでした。開館15周年記念企画展「中国西南部の旅人―鳥居龍蔵と高原の少数民族―」（会期：2026年１月31日（土）～３月８日（日））では、この支出記録を含む関係資料を通じて、鳥居と中国西南部のつながりについて紹介します。

（坂東　泰）

文化の森総合公園
徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

鳥居龍蔵記念博物館の成り立ちについて
― 開館15周年によせて ―

はじめに

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館（当館）は、徳島が生んだ知の巨人・鳥居龍蔵を顕彰する博物館です。鳥居は生前、国際的に高い評価を得た人類学者でしたが、その名を冠した博物館は広い世界中に当館だけしかありません。したがって、唯一無二の個性的な博物館といえます。

ところで、当館は「徳島県立鳥居記念博物館」（鳴門市）の移転・改組により、2010年、徳島県文化の森総合公園（徳島市）に開設されました。1990年にオープンした文化の森には、五つの文化施設（県立図書館・博物館・近代美術館・文書館・二十一世紀館）がありましたが、開園20周年記念事業の目玉として、6番目の施設である当館が加わったのです。それ以来、15年の時を経ました。改めて、当館の成り立ちを振り返ってみましょう。

鳥居記念博物館の誕生 ―鳴門のランドマーク―

当館の前身である徳島県立鳥居記念博物館は、1965年3月、鳴門市撫養町（むやちょう）の妙見山頂（みょうけんさんちょう）に、天守閣を模した建物として開館し、裏庭には鳥居夫妻の墓が設けられました。

妙見山頂は、中世から近世にかけて実在した岡崎城の跡で、桜の名所として知られていました。そこにつくられる新たな観光のシンボルとして、鳥居記念博物館には天守閣風デザインが採用されました（図１・２）。

この博物館が鳴門市に設けられることになったのは、熱心な誘致によるもので、市民や地元企業などの尽力により完成しました。そして、ランドマークとして長く親しまれました。

この博物館に収蔵・展示されたのは、鳥居の収集したさまざまな資料や蔵書、原稿その他の遺品で、妻きみ子ら家族に関する資料も含まれていました。鳥居の生涯が凝縮された資料群は、わが国の人類学や考古学等の歩みを物語る貴重なものでした。

図１　建設中の鳥居記念博物館

図２　竣工時の鳥居記念博物館

鳥居龍蔵記念博物館への転生 ―老朽化から移転へ―

県民に親しまれた鳥居記念博物館は、開館から40年弱を経た頃、施設の老朽化が深刻になるとともに、障がい者の利用にも対応できないといった設備上の問題や、資料の保存・活用の不十分さが指摘されるようになりました。そのため、文化の森への移転が考えられるようになりました。

2006～07年には、「鳥居龍蔵博士の顕彰等に関する検討委員会」において、移転後に設置予定の「鳥居龍蔵記念博物館」のコンセプトや活動などについて検討されました。さらに2008～09年には、「徳島県立鳥居龍蔵記念博物館展示検討委員会」において、展示計画がまとめられました。

文化の森では、既存施設を改修して収蔵庫と常設展示室を設け、企画展示室などの施設・設備は、県立博物館のものを共用することとなりました。まず2008～09年度に収蔵庫がつくられ、およそ7万点の資料が、3回にわたって鳴門から移されました（図3）。

図3　移転に伴う資料梱包作業

続いて2009～10年度には、常設展示室が整備されました。全面的にLED照明を採用したり、車いすで観覧しやすい構造を追求したりして、工夫を凝らしました。また、展示の内容についても映像を多用したほか、鳥居が調査を行ったフィールドの広大さを体感できるよう、床に東アジアの地図を設置したり、鳥居が研究に打ち込んだ中国北辺の王朝・遼（りょう）の皇帝陵壁画の原寸大模型を設けたりするなどして、楽しく学べることを目指しました（図4）。

図4　常設展の第1展示室
床地図や壁画模型が設けられています。

かくして、文化の森開園20周年の節目の日である2010年11月3日、開館を迎えました。

それから、これから ―おわりにかえて―

開館から15年を経て、当館の活動は順調に推移し、国内外とのネットワークが強まってきました。また、展示や調査研究の蓄積、資料の公開が進むとともに、情報発信や次世代育成にも注力しています。

当館の歴史は、前身を含めると、実に60年に及びます。この歴史を踏まえ、これからも事業の充実に努めていきたいと考えています。

（長谷川賢二）

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館　開館15周年記念企画展

中国西南部の旅人

―鳥居龍蔵と高原の少数民族―

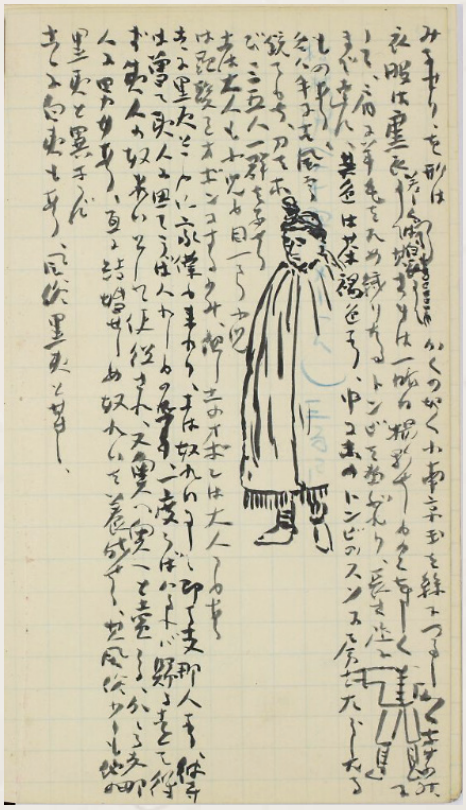
徳島県出身の人類学者である鳥居龍蔵は、19世紀末から20世紀前半にかけて、東アジアの各地を調査しました。その中でも、1902（明治35）年から翌年にかけて中国西南部を旅し、現地の少数民族を調査したことは、フィールドワークだけでなく、現地に関する豊富な文献を用いて調査することの重要性を鳥居に意識させたと言われています。

また、当館の所蔵資料から、鳥居は中国西南部に関する学位論文を書こうとしたが、後にテーマを「満蒙の有史以前」に変えたことが見えてきました。さらに、晩年の彼が中国西南部について研究していたことも確認されました。

当館の開館15周年に当たる今年度の企画展では、鳥居が中国西南部の調査を計画した背景、鳥居が現地で出会った少数民族、調査を終えた後の鳥居と中国西南部のつながりについて紹介します。

会　　期　**2026年1月31日(土)～3月8日(日)**
会　　場　**徳島県立博物館1階　企画展示室**
開館時間　**9：30～17：00**
休 館 日　毎週月曜日
　　※2月23日(月・祝)は開館、翌24日(火)休館
観 覧 料　一般200円、高校・大学生100円、小・中学生50円
　　※各種減免あり
主　　催　徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・徳島県立博物館
協　　力　国立民族学博物館

鳥居龍蔵が調査した頃のミャオ族（当館蔵）



フィールドノート「西清のたび」（当館蔵）に現れるイ族のスケッチ

展示構成

第１章　動機としての台湾調査

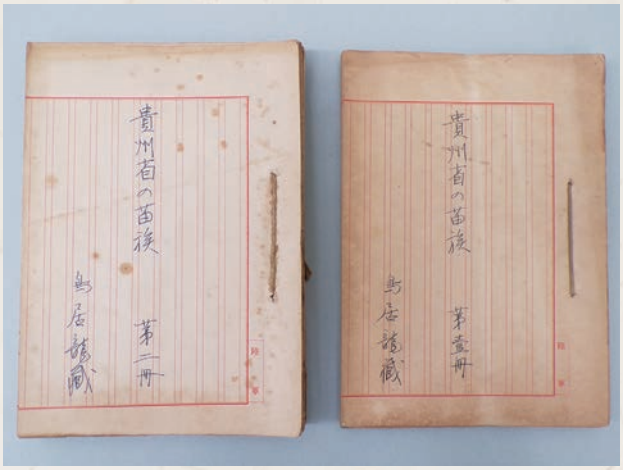
鳥居が中国西南部に向かうきっかけとなった台湾調査を概観します。

第２章　鳥居龍蔵、中国西南部を旅する

鳥居が中国西南部で調査した少数民族や、その関連資料を紹介します。また、鳥居の調査に対する反響を、調査が計画される背景となった学説に注目しながら紹介します。

第３章　旅を終えた後の鳥居龍蔵と中国西南部

鳥居の学位論文提出に関するエピソードや、彼が晩年に残した未公刊原稿などから、調査終了後の鳥居と中国西南部のつながりを紹介します。



未公刊原稿「貴州省の苗族」（当館蔵）
晩年の鳥居が残した未公刊原稿の一つ。中国の歴史書などに基づいて、中国西南部における漢族と少数民族の関係を論じようとしたようです。

関連行事

記念講演会（第１回）

「ミャオ族の文化を探る」

日時　２月１日（日）　13：30 ～ 15：00
　　※受付開始は 13：00 から
会場　文化の森　イベントホール
講師　鈴木正崇氏（慶應義塾大学名誉教授）
定員　100 名
　　※申込不要、先着順、参加無料

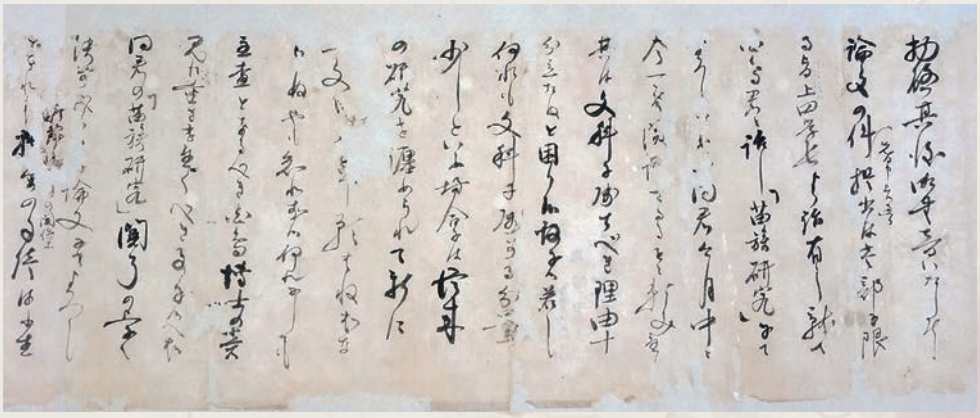
記念講演会（第２回）

「鳥居龍蔵と中国西南部」

日時　２月 22 日（日）　13：30 ～ 15：00
　　※受付開始は 13：00 から
会場　文化の森　イベントホール
講師　吉開将人氏
　　（北海道大学大学院教授）
定員　100 名
　　※申込不要、先着順、参加無料

展示解説

日時　２月７日（土）、２月 28 日（土）、
　　３月８日（日）
　　いずれも 13：30 ～ 14：30
会場　徳島県立博物館１階
　　企画展示室
　　※申込不要、観覧料が必要



服部宇之吉が鳥居龍蔵に送った書簡［部分］（当館蔵）
鳥居が「苗族研究」と題する学位論文を提出することについて、東京帝国大学教授だった服部と相談していたことを伝える書簡です。

ゆかりの地
今昔

鳥居龍蔵が見た勝瑞城跡

鳥居龍蔵は、1922（大正11）年３月27日から４月４日にかけて徳島に滞在し、県内各地でフィールドワークを行いました。その調査地の一つとして、藍住町の勝瑞城跡（現在の見性寺境内）に立ち寄っています。このことは『阿波名勝』２号（1922年）に、「勝瑞に下車、勝瑞城址に懐古趣味を味ひ、日暮れて帰市した」と記されています。ここでは、鳥居が立ち寄った勝瑞城跡と、その位置づけについて紹介します。

鳥居が勝瑞城跡を訪れた頃は、見性寺境内に室町時代の阿波守護である細川氏や、戦国時代の大名である三好氏の政治拠点である館が置かれていたと考えられていました。鳥居は自らが深く編集に関わった『川内村史』（1937年）において、勝瑞に阿波の政治の中心が置かれた時代を「勝瑞時代」とし、見性寺境内を「城址の名残りたる、一部分に過ぎない」と指摘しながら、ここに館があったとしています。

しかし、1994年以降に藍住町教育委員会や徳島県教育委員会による勝瑞城跡周辺の発掘調査が行われると、それまでの認識が一変します。まず、1994年の発掘調査において、勝瑞城は「勝瑞時代」の末期である1580年頃に築かれたことが分かりました。細川氏や三好氏の館がここにあったとするならば、15～16世紀の痕跡があるはずですが、そうではないため、鳥居が生きた時代の勝瑞城跡の認識と、発掘調査から分かった事実との間にズレが生じました。

そして、1997年から城跡の南西地点の発掘調査が行われると、15～16世紀を主とした大量のやきものや銅銭などが出土し、権威を象徴する庭園跡や会所跡などが発見されたことから、ここに「勝瑞時代」の館があったことが分かりました。つまり、細川氏や三好氏の政治拠点は実はこちらにあって、鳥居が当時見ていた城跡は、「勝瑞時代」の末期に館を守るための詰城（最後の砦）として築かれた、「一部分に過ぎない」ものだったということが分かってきたのです。

現在、城と館の両方が「勝瑞城館跡」として国史跡に指定され、発掘調査と保存整備が進められています。ぜひ皆さんも勝瑞城館跡を訪れ、鳥居と同じように、細川氏や三好氏が栄華を誇った「勝瑞時代」に思いを馳せてみてはいかがでしょうか？　（大塩啓一郎）

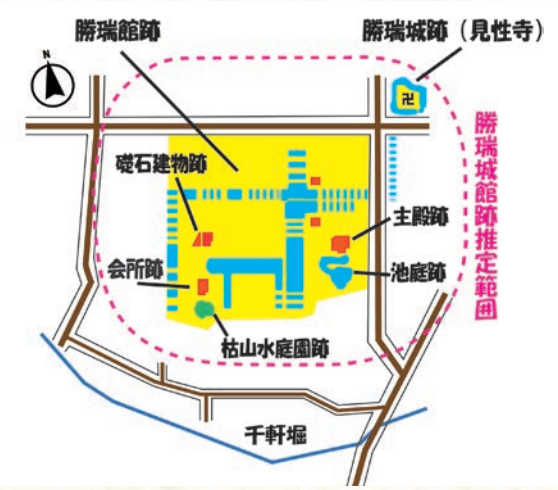


図１　勝瑞城館跡推定範囲模式図
（藍住町教育委員会作成、一部改変）

図２　勝瑞城跡（見性寺境内）
土塁と堀を見ることができます。

資料整理の最前線

台湾フィールドノートの挿絵

現在、当館では、鳥居龍蔵が台湾調査の際に記したフィールドノートの解読作業を進めています。このフィールドノートには、調査の記録としての文字情報だけではなく、文字情報を補うような挿絵が複数みられます。鳥居は、日本人として初めて人類学的調査にカメラを用い、多くの写真を残したことで知られていますが、古典的な記録方法である絵も用いていたのです。そこで、フィールドノートの中にみられる挿絵について、３つのパターンに分類して紹介したいと思います。

①鳥居によるスケッチ（図１）

鳥居は、台湾の先住民族（台湾では「原住民族」が正式名称）を調査する中で様々なものを目にし、複数のスケッチ（写生画）を描いています。これらのスケッチは、資料の詳細な観察記録として写実的であることが特徴です。

②鳥居による略図（図２）

①のほかにも、調査の補足情報として描かれた挿絵があります。具体的には、鳥居が収集した資料の採集状況を示すものや、撮影した写真に写された人物の情報などがみられます。このようなメモとしての絵は、実際の収集資料や写真と対応させることで、これまで詳細にわかっていなかった資料の伝来や写真の内容を明らかにすることができます。

図１　土器のスケッチ
鳥居が土器を観察したメモがあります。

③台湾の先住民族が描いたと思われる絵（図３）

フィールドノートの挿絵の中には、鳥居が調査の過程で対象とした先住民族の人々に描いてもらった絵もあります。これらは、強い筆圧で、抽象的に描かれています。

このように、鳥居の台湾フィールドノートには３つのタイプの挿絵がみられます。挿絵の持つ情報にも注意しながら、フィールドノートの解読作業を進めていきたいと思います。（矢野大輔）

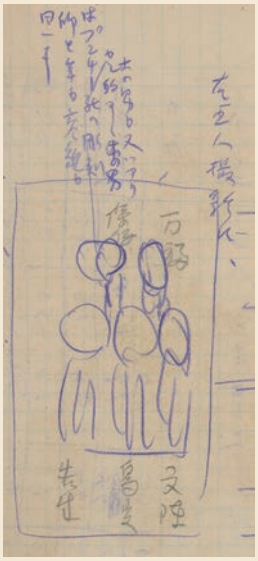


図２　鳥居が撮影した写真に関する略図
写真に写る先住民族の人々の名前が記されています。

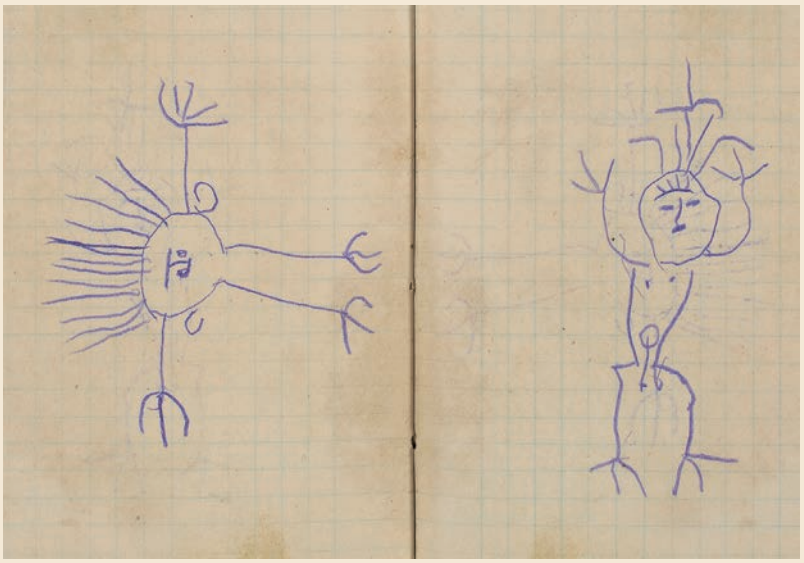


図３　先住民族が描いたと思われる絵

鳥居龍蔵記念博物館の 展示・普及行事について

2025年下半期に実施した当館の普及行事と、今後の予定をお知らせします。

文化の森よるあそび「モンゴルナイト」(9月19日)

県民から寄贈されたモンゴルの移動式住居ゲル・パオの模型や婚礼衣装などを展示し、鳥居龍蔵・きみ子夫妻が訪れたモンゴルの文化や風俗に親しんでもらいました。

令和7年度　鳥居龍蔵セミナー（10月19日）

当館の学芸員らが取り組んでいる研究テーマについて、わかりやすく解説する連続講座です。今年度は、全5回を開催しました。写真は、第5回の「鳥居龍蔵の北京移住とその周辺」の様子です。

文化の森秋祭り（11月3日）

アジア各地の民族衣装の試着をとおして、鳥居龍蔵の活動を知ってもらうコーナーを設けました。多くの親子連れに楽しんでもらいました。

今後の予定

- トピック展示「鳥居きみ子の紀行文」 12月2日(火)～3月22日(日)
- 文化の森ウィンターフェスティバル 2月11日(水・祝)
- 鳥居龍蔵記念　徳島歴史文化フォーラム 2月14日(土)
- 鳥居龍蔵記念　全国高校生歴史文化フォーラム 2月15日(日)
- 鳥居龍蔵ゆかりの地を歩こう 3月22日(日)

鳥居龍蔵（1870－1953）

1870(明治3)年に、現在の徳島市で生まれた人類学・民族学・考古学の研究者。日本国内のほか、台湾、中国西南部、中国東北部、朝鮮半島、シベリア、サハリン、千島列島などで、民族調査や遺跡の発掘調査を行い、その成果を多く著作にまとめた。主な業績は『鳥居龍蔵全集』全13巻に収録されている。

鳥居龍蔵記念博物館　NEWS LETTER　№9
発行年月日　2025年12月1日
編集・発行　徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
〒770-8070 徳島市八万町向寺山（文化の森総合公園内）
TEL 088-668-2544　FAX 088-668-7197
https://torii-museum.bunmori.tokushima.jp